

週 報

「信じます。

不信仰なわたしを、
お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



人と神、人と人をつなぐ難しい働きをしています
日本基督教団 西宮公同教会

〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

koudou@gamma.ocn.ne.jp

小さな手大きな手

(前週よりのつづき)

「東京電力福島第一原発事故に伴う特定帰還居住区域の避難指示解除に向け、双葉町は11月4日に3行政区の一部で立ち入り規制を緩和する方向で調整に入った。住民が許可なく自由に入出りできるように変わり、自宅などで帰還準備を進める。住宅がある地域の特定帰還居住区域では、初めての規制緩和となる。3日、町役場で始まった町政懇談会で伊沢史朗町長が示した」「これまでは許可証の申請・所持を必要としていたが、区域内のバリケードを解放し、自由な立ち入りが可能となる」「自宅への宿泊は認められていない。このため町は帰還準備のために町内の宿泊施設に泊まる際の費用を一部補助する。一泊当たり一人4500円で、約60世帯が対象となる」「対象区域は現在、除染が進み、9月中旬時点で34%が完了。平均放射線量は国が避難指示解除基準の一つとしている年間積算線量20ミリシーベルト(毎時3.8マイクロシーベルト)を下回っている」(以上、10月4日、福島民報)。

帰還困難区域(平均放射線量、50mSv/年以上)だった双葉町に、元の町の中心部を中心にそこを重点的に徹底除染を実施することで、「特定復興再生拠点」が設けられることになりました。だとしても、「拠点」の名に値しないのは、そこを拠点にして、「広がって行く」見通しの立つものではなかったからです。

拠点というのは、「そこを『拠点』にして、何かが始まる」からであって、拠点から一歩踏み出すことは、放射線の年間積算量が50mSv/年以上の、帰還困難区域だからです。

もちろん、避難している人たちが、戻って生活する拠点ではありません。生活と言うものは、元々双葉町の人たちにとって、東電の仕事があったにしても、住む家があって、そこを拠点にして、耕す田畑があり、四季折々に、そこを拠点にして、周辺の山々に出かけて行って、そこで営々として営まれてきた、自然、その恵

みがあってこそ日々の生活でした。「特定復興再生拠点」にちろこまって生活するのが、双葉町の人たちの生活ではありませんでした。

ましてや、その特定復興再生拠点区域に隣接するのが「中間貯蔵施設区域」であり、更にそれに隣接するのが、事故の東京電力福島第一原子力発電所です。

その東電福島は、「特定原子力施設」という「定義」で、本来はあり得ない事故で発生し続ける高濃度の放射性物質が「仮置き」され、緊急事故対策によって、高濃度の放射性物質が環境中に漏れ出し続けています。そうして漏れ出した放射性物質は、これからもずっと増え続けることがあっても、減らすこともそこから何処かへ移すこともできないし、その見通しも立っていません。

緊急の事故対策は、「処理」とは言うものの、それを増やし続けることになっています。増やすための仮置きもできなくなった、そして処理不能の放射性物質、トリチウムはすぐその海水で薄めて、すぐその海に流しています。

「除去」したとされる高濃度の放射性物質は、仮置きして増え続けています。もうかなり前のことですが、「除去」したセシウムの「セシウム吸着塔」はその時点で1070本でした(2025年7月末時点)。その後も増え続けています。

残りの「多核種」と呼ばれる放射性物質も、増え続けており、2025年7月時点で5578本、それを仮置きする場所も限界に近付いていると言われていました。

もちろん、そこも、その近くも人が生活する場所ではないし、近づきたくもないし、そもそも、近づいてはいけない場所なのです。

それに隣接するのが、中間貯蔵施設区域です。

(次週につづく)